

ポスターが映す世相 豪華客船

摩天楼のように屹立する船首。仰角で捉えられた「ノルマンディ号」の威風堂々たる姿は、巨大な錨に比してフランス国旗や鳥たちや波頭が極端に小さく配されることで、さらに強調されている。鳥の鳴き声、低く大きな汽笛、波を切る音、船旅の旅情を誘う音たちが画面から聞こえてきそうである。アール・デコ・スタイルを代表するグラフィック・デザイナーのカッサンドル(本名:アドルフ・ジャン・マリー＝ムーロン)は、圧倒的な迫力を持つ「ノルマンディ号」を幾何学的な簡潔さで描き出し、ポスター史に残る傑作を生み出した。

イギリスの船「シリウス号」が蒸気船として初めて大西洋を横断したのが1838年、それからほぼ一世紀後の1935年に「ノルマンディ号」は建造されている。「ノルマンディ号」が建造される前後の1920～40年代は「豪華客船の黄金時代」と呼ばれるほど、大西洋航路を中心に各国の客船が、その速さ、大きさ、豪華さを競った時代であった。船の内部装飾全体がアール・デコ・スタイルで飾られた「ノルマンディ号」の建造が、長時間の船旅を豊かにするためだけでなく、国家の威信を賭けたプロジェクトでもあったことは、その建造の経緯を振り返ってみればよく分かる。C.G.T(フレンチ・ライン)が「ノルマンディ号」の構想を開始するのは1929年、世界恐

慌が吹き荒れる真ただ中のことである。1931年に建造に着手し、フランス国家の助成を受けて1935年に就航した「ノルマンディ号」は、全長314メートル、総重量79,280トンの巨大さで、当時の世界最大の客船としてデビューしたのである。世界一は大きさだけではなく、大西洋を最速で横断する船に与えられる「ブルーリボン賞」も獲得している。しかし同時期にイギリスは「クイーンメリー号」の建造に着手、「ノルマンディ号」に遅れること1年、1936年に就航すると大きさ(総重量81,327トン)、速度ともにナンバーワンの座を奪い取った。直後に「ノルマンディ号」は改装され、客室とサロンを増設することで83,423トンとなり再び世界最大の栄誉を得るのである。

「海を制するものが世界を制する」と言われた時代、欧米が独占していた海上交通に、大阪商船や日本郵船といった海運会社が航路を開拓していくことになる。それは、明治以降の日本の世界進出と軌を一にするものでもあった。1893年には日本郵船が日本初の遠洋航路となるボンベイ航路を開設、1920年代には海上ネットワークが完成の域に達する。日本郵船は、現在博物館として保存されている氷川丸をはじめとして、多くの豪華客船を建造、就航させてきた。小磯良平が描いたNYK LINEのポスターは、日本郵船が1938年か

ら1940年までの間に建造した三隻の豪華客船である「新田丸」「八幡丸」「春日丸」を擬人化して表現したものである。この三隻は、新田丸級三姉妹船と呼ばれ、それぞれの頭文字が日本郵船の社名から取られていることから分かるように、日本郵船を象徴する客船であった。小磯は、日本が世界に誇る豪華客船を、背格好も顔立ちもそっくりで、三つ子のような和装の三姉妹に例えてみせたのだ。背景に源氏物語らしき屏風絵が配されるなど、強く「日本」が示されている。実際、新田丸の船内装飾は、一等ラウンジに六歌仙のエッチング、一等食堂のサイドボードの扉には尾形光琳の紅白梅図屏風を模した蒔絵が施されるなど、「日本」が強く意識されたデザインとなっていた。このような「日本」の前景化は、海上交通や造船技術で世界と競う日本の気概の表明であったであろうが、そればかりか、日中戦争が始まっていたこの時代のナショナリズムの反映が透けて見えているのかもしれない。いずれにせよ、その後の客船の運命に思いを馳せると、身を寄せ合うようにして座る三姉妹の表情に、一種の悲哀を感じずにはおられない。

当時の豪華客船の末路は物悲しい。「ノルマンディ号」も新田丸級三姉妹船も、第二次世界大戦の勃発により、軍用船へと転用するべく接收されてしまうのである。1940年のパリ陥落により、ニューヨークから帰港できなくなった「ノルマンディ号」は、翌年アメリカ軍により接收、兵員輸送船へと改装すべく工事が開始されたが、溶接工のミスにより救命胴衣に引火、放水により船体が横転、復旧困難とされ、解体されてしまった。日本郵船の三隻は、それぞれ「新田丸」が空母「沖鷹」(1942年改装)、「八幡丸」が空母「雲鷹」(1942年改装)、「春日丸」は1940年に進水を果たすものの、竣工は1941年、特設航空母艦としてであった(翌年「大鷹」に改名)。いずれもアメリカ軍の潜水艦による攻撃によって沈没、今はその姿を見ることはできない。

第二次世界大戦後、大陸間交通の主流は航空機へと移っていく。豪華客船の旅は、クルーズによる周遊へと場を変えていくことになるのである。

美術工芸資料館准教授 平芳 幸浩